

流れ流れて

永津わか

新緑が眩しい木々の中、湯気もうもうと湧いている。

「明け方に逃げてしまったんだと思います」

直径一メートルほどの小さな温泉。囲う岩の一つにしゃがんだ湯守さんは曇った眼鏡で振り返った。

この温泉旅館を訪れたのは、ふいに気力が切れたからだだった。繁忙期も終盤に差し掛かった一週間前、自分の些細なミスや部下のサポート、上司からの追加の依頼、あれこれが積み重なって唐突にブレーカーが落ちた。

好きで選んだ道と言えど望んだ結果ばかりじゃない。それは重々分かっている。加えて私はもう三十を超えたいいい大人で、あと少しを乗り切らねばならない。なけなしの見栄でスマートフォンを動かし、次の休みに温泉旅行を予定した。

観光して温泉に浸かって料理に舌鼓を打って、ふかふかの布団で眠りについたのが昨日。満喫した一日の次に迎えたのは、アラムより前の爽やかな目覚めだった。

窓を開けると薄い日差しに緑豊かな景色が広がっていた。けれどそれも残りわずかだ。遅くともお昼にはここを離れなくてはいけない——という現実に気づいて、少し心臓が重くなった。いや、十分に楽しんだじゃないか。

子どものような我儘を振り切って庭へ散歩に出かけると、前方の水たまりに卵が落ちているのを見つけた。心地良い風に任せていた足がぴたと止まる。

卵。

近所の道端だったら二度見してそっと立ち去っただろう。けれどここは温泉地で、まあ、そういうこともあるかもしれないと思った。割れていないから温泉卵だろう。ゴミ箱を探しつつ卵を拾う——と。

ふやん。卵は指の腹に合わせて形を変えた。

ぎょつとして変に力がかかり、卵のはずである物体は手のひらに転がり落ちる。つるりんとした表面。鶏卵より小さく鶉の卵より大きい、楕円性の緩い卵型。これは——何だろうか。「すみません、そちら入れていただいても」

そこへ走り寄ってきたのが湯守さんだった。旅館の従業員という自己紹介もそこそこに、透明な液体の入ったプラスチック製のボトルを開けて差し出してきた。ほんのり湯気が立つのを見るに中身はお湯らしい。穏やかな口調とは裏腹に引かないボトルに圧されて、私は手の中の卵（仮）を中に転がり落とした。音もなくお湯に入ったそれはボトルの中で嬉しうに上下する。

「……あの、これって」

「温泉の卵です」

「温泉、卵」

「温泉の卵です」

大判焼きと今川焼きくらいの違いだろうか。先日会社で起きた論争をぼんやり思い出している間に、少しお付き合いいただけませんか、という湯守さんの言葉に頷いていた。

「――温泉は人の手をかけないと育たないんです」

道中で湯守さんが話してくれたには、生まれた温泉を放っておくと涸れてしまうらしい。ごく稀に自然で育つ個体もいるが、刺激が強すぎて人間には向かず、しかも一代で消えてしまう。温泉の息を繋ぐため、人の手をかけて卵を孵して育てているそうだ。

「今はここで育てているんですけど、どうもいたずら好きで」

小さな温泉を前にして、湯守さんは平らになっている岩の一つにしゃがんだ。

「明け方に逃げてしまったんだと思います」

曇り眼鏡で振り返った湯守さんの目の奥は見えなかったが、まあ、そういうこともあるかもしれないと思った。

「それじゃあ、お願いしていいですか？」

湯守さんに蓋を開けたボトルを渡される。隣の岩にしゃがんで、教わった通りに透明な温泉へ、手ごとそうっと沈めていく。

と、ぶん。

かすかな抵抗を抜けると弾力のお湯に迎えられた。ゼリーのような感触は一瞬で滑らかに溶けて、ボトルから卵がするする出てくる。温泉に入ると私の指の背を撫でて、消えるように見えなくなった。

「拾ってくれたあなたの言うことなら聞くかと思いましたが」

目尻を下げた湯守さんには姿が見えているのかもしれない。お湯が寄せては返し、それでも卵に撫でられた感覚は浚われなかった。

「卵が孵ったら、旅館の温泉に？」

いえ、と湯守さんは首を振った。

「元場所に帰します。温泉子どもになるまで数年待つてからですが」

そのうち温泉大人になったら、いくつかの支流がこの温泉に来てくれるかもしれませんね。湯守さんは木々の奥を眺める。

「……大変ですね」

思わず呟くと、そうですね、と湯守さんは笑った。柔らかな苦笑のような、それでいて満ちた、どこか覚えのある笑顔。――ああ、そうだ。

「あの」

揺らめく水面がきらきらしている。湯守さんがこちらを見る。

「次に来た時は、温泉子どもに会えるでしょうか」

瞬いた湯守さんは「ぜひ」と破顔した。

その笑みの正体を私は知っている。それがあある場所も。だから私も帰って――また私の好きをやろう。そうしたらきつと次の流れへ、次の良いお湯へ流れていけるような気がした。